
鍵 ～ある怪盗の呟き～

深川辰巳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鍵 ～ある怪盗の眩き～

【コード】

N0320I

【作者名】

深川辰巳

【あらすじ】

いかなる鍵も開けるといふ怪盗の眩き。

(前書き)

怪盗はどのようなことを呟きながら、盗みに入るのでしょうか？

・No Title

俺様は怪盗ルピアーノ一世。

二世の予定は無い。

「ふん、こんな南京錠楽勝だぜ」

俺様に開けられぬものはない。女の股以外はな。

ちよちよいつと針金で南京錠を開けてかんぬきを外し、部屋の
中に滑り込む。

「さーて、お宝は……ふほう！ 伝説のルビー・アビスの瞳！

今、お迎えに来たぜ」

部屋の電気はついていないというのに、その輝きは存在を自己主張している。

これを手にした者は死ぬと言われていることから、博物館で誰にも触れられぬようにしているとのことだが、知った事じゃない。

「人間はいつかは死ぬもんだ。アビスの瞳に触れようが触れまい
がな」

お次はケースの鍵か。

「ダイヤル式……これも楽勝だぜ。この程度の対策で盗まれないと思っ
ているなんて甘い甘い」

息を殺し、耳を澄まして、わずかな音も聞き逃さない。

「よし、バツチリだぜ。」ご対面……」

あ、あれ？ 開かない？ この俺様が失敗した？

「ふっふっふっ。そこまでだ。ルピアーノ」

「その声は、柴田のとっちゃん！」

俺様が入ってきた扉の向こうには多数の光。その光を浴びて姿を現したのは、行く先々で俺様を追いかけてくる刑事だ。

「意外そうな顔をしているな。そこまで言うなら教えてやろう。な
ぜ、ケースが開かなかったのかをな」

「まだ、何も聞いてねえよ」

「ケースは最初から開いていた。つまり貴様は開いている鍵を自分で閉めたのだ！」

トレンチコートの刑事が一步、一步、ゆっくりと近づいてくる。

逆光で見えないが勝ち誇った表情をしていることだろう。

「なぐるほど、とっちゃん。考えたねえ」

「何年貴様を追いかけてきたと思う」

「とっちゃんの心の扉はいつになったら開けるのかねえ」

「怪盗ルピアーノ一世に開けられぬものがないのは女の股だけじゃ

無かったのかね？」

手の届く距離。

「こりゃ追加しないとねえ」

「年貢の納め時だ！ ルピアーノ！」

とっちゃんが手錠を持って振り上げる瞬間を狙って、時計に仕込んだフラッシュを炊く。

「あばよ！ とっちゃん！」

「ま、待て！ ルピアーノ！ 何をしておる！ 早く追いかけぬか！」

「警部も追いかけられますか？」

「もちろんだ！ お前はルピアーノが戻ってきたときに備えて、ここに残れ！」

「は！」

「待てえ！ ルピアーノ！」

もうお気づきだろう。残された警察官は俺様の変装さ。

「今度こそ、本当にあばよ、とっちゃん。アヌビスの瞳はいただきます
ていくぜ」

俺様はルピアーノ一世。

二世の予定は無い。

俺様を開けられぬものはない。女の股ととっちゃんの心の扉以

外はな。

(後書き)

如何でしたか？

感想をお待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0320i/>

鍵 ~ ある怪盗の呟き ~

2010年10月11日12時09分発行